

イニアルはありません。棟の痕跡を見ると、創建時に設置されていたのではないかと思います。この出入口は別棟の教室棟や外便所と結んでいました。ドアの見切り板がかなり擦り減っています。それだけ往来の多い出入口だったと思われます。

20 正面西端部

次に西端部角を左に曲がれば、正面西翼です。方形屋根の頂部には、旗印型風見が風向を示しています。



西端部角

21 玄関ポーチ

—最も装飾性の高い空間—

旧本館の外を一周して、正面玄関に戻ってきました。ここで尖頭アーチをくぐると玄関ポーチになります。ポーチとは玄関の屋根付きの入口空間をいいます。

ポーチの天井を見上げると、白漆喰の天井漆喰飾り（漆喰彫刻）が目を引きま。幾重にも施された額縁の中央に六芒星（ヘキサグラム、ダビデの星）の文様が配されています。星の中心部や先端部にはアカンサスの花や葉が飾られ、力強さの中にも華やかさを持つ独特な六芒星となっています。なぜ、ここに六芒星を飾ったのかは不明です。中世のキリスト教の教会堂では時折、六芒星をトレーサリーに用いたことがあったことから、パターンブックを参考に採り入れたのかも



盛夏の旧本館・玄関ポーチ



六芒星の天井漆喰飾り

れません。あるいは、日本古来からある同形の「籠目」という文様が魔除けとして用いられることがありましたので、玄関口の魔除けとして配したのかも

れません。次に、玄関正面に目をやれば、白漆喰の壁に小豆色の木骨装飾と観音扉が浮かび上がっています。白色と小豆色のコントラストは見



木骨装飾の観音扉

応えがあります。デザインはトレーサリーを大胆にアレンジして、アーチ形やカトルフォイルの文様を鮮明に表しています。シックでありながらも華やかな造形です。

腰板や窓枠にカトルフォイルを施した装飾性に富む観音扉のドアは、杉材を使用した厚さ4cmの重厚なものとなっています。一般的に玄関の扉は外開きですが、なぜか内開きです。扉枠の上部には、ボールフラワー（円花飾り）が装飾性をより高めています。イギリス中世のゴシック建築に多く使われた花卉形の円球の装飾です。



扉外側中央のボールフラワー



扉内側右のボールフラワー



扉外側左のボールフラワー



玄関ホール・ポーチから前庭を望む

22 校舎の内観

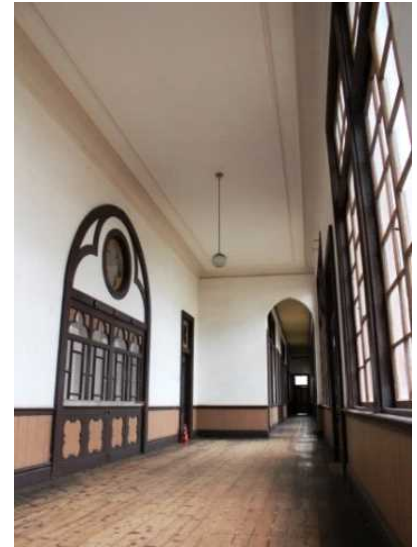
一人作りのための明るく落ち着いた学習環境—

御影石の階段を登って大きな観音扉を開ければ、玄関ホールです。校舎内に一歩足を踏み入ると、天井の高さ、床板の厚さ、建具の重厚さに圧倒されます。

玄関ホールに立って特に驚くのは、天井が極めて高いことです。明治28年に文部省が「学校建築図説明及設計大要」で示した教室や廊下の高さは9尺(2.7m)でしたが、旧本館では17尺(5m)と規定の倍の高さにしています。これは、太陽光をできるだけ多く採れるようにするとともに、ゴシック建築の縦長を強調し美の追求をしたためと考えられます。また、校舎内の壁はすべて白漆喰ですので、シンプルで明るい雰囲気を醸し出しています。荘厳でどっしりと落ち着いた校舎は、日本の近代を担う若者たちへの期待の大きさを感じさせます。

廊下の幅はかなり狭い感じがします。文部省の設計大要に従って幅6尺(1.8m)としていますが、天井があまりにも高いため狭く感じるものと思われます。旧本館は、片廊下式の凹字型で左右対称を原則としていますので、廊下はすべて校舎の内側に配置されるべきですが、西教室の廊下は例外的に外側に配置しています。これは強烈に差し込む西日が直接に入らないようにするとともに、設計大要の「光線ヲ生徒ノ左ヨリ採ルヲ要ス」との指示に従ったと思われます。電灯のない時代、外光が左側から差し込むように配慮したようです。

廊下の板張りは、各教室と同様に杉材が使われています。創建当時から綺麗な木目で生徒を迎えてきました。



天井の高い玄関ホール

23 宿直室

ここからは校舎内の各部屋をご案内します。まず正面東翼から観ていただきます。玄関左隣には、装飾性の高いドアがあります。中に入ると、旧本館で唯一の畳敷き和室の宿直室となっています。なぜか、この部屋の出窓のみ外開きの観音開きです。なお、宿直制度は昭和40年代中頃に終了し、無人の機械警備となっています。



宿直室ドア



畳敷きの宿直室

24 事務室

宿直室ドアの左隣には、来客者の受付や生徒の授業料納入などを行う上げ下げ開閉式の窓口があります。さらに左に進むと引き違い戸の事務室出入口です。

中に入ると事務室から隣室の校長室や宿直室に通じる観音扉のドアがあります。廊下を通らず



事務室から見通した校長室・職員室



事務室の受付窓口



事務室前から西側を望む

に行き来できるようになっています。校長室と事務室を合わせた部屋面積は、左右対称の原則により復元教室と同じです。

25 校長室 —最も重厚感のある贅沢な造り—

事務室の左隣は、校長室です。部屋のドア、扉枠、腰板、天井などに最も華麗な装飾が施され、重厚感のある贅沢な造りとなっています。装飾にはカトルフォイルの文様がふんだんに使われています。校長執務机は、創建当時のもののようです。



校長室内部



校長室出入口の観音扉



装飾性の高い扉枠・腰板



重厚な天井

26 職員室 —広々とした明るい空間—

さらに校長室の左隣が職員室です。かつては校長室と職員室との間に会議室がありました。昭和16年に生徒増に伴う教職員数の増加により職員室が手狭になったため、会議室と職員室とを仕切る壁を撤去して広い職員室としました。現在、その壁の痕跡が見られます。職員室は、壁の部分が極めて少なく、三方が広くて高いガラス窓になっているため、外光が充分に入り、開放的で明るい空間となっています。

出入口ドアの見切り板は、激しく磨り減り窪んでいます。旧制中学校時代は教師も生徒も革靴のまま校舎に出入りしたため摩耗したのだと思われます。この部屋は、創立90周年を機に、資料展示室として整備されました。主な展示品は、同窓会誌「進修」の各号、藤田東湖像、校舎模型、旧制中学校校旗、永瀬義郎氏作品などです。



摩耗した扉の見切り板



明るく開放的な職員室、隔壁の痕跡



職員室（第1資料展示室）

27 東教室 —学習環境に配慮したシンプルな造り—

正面東端の廊下を左に折れると、東棟部です。ここには普通教室が2室あります。正面中央部の装飾とは明らかに違って、教室の柱や壁などには装飾が全くなくシンプルな造りとなっています。創建当時は電気がないため、高い天井に届く程の縦長の上下開閉式窓によって、採光を十分に確保していました。壁は、白漆喰であるため、明るく清潔感のある部屋となっています。換気のため天井の四隅にはカトルフォイル文様の通気孔が設けられています。このように教室は学習環境に配慮した造りとなっています。この2教室は、管弦楽部の練習場・部室として長年愛用されてきました。



東教室（管弦楽部練習場・部室）

28 改修工事板

—昭和49年度改修工事の記録—

東棟端部の廊下の上部には、昭和49年度の旧本館改修工事に関する工事大要などを記載した改修工事板が掲示してあります。両棟端部の各1教室の撤去を中心に復元改修工事が行われたことなどが記されています。

なお、ここからガラス窓越しに眺める旧本館も味わい深いものがあります。板ガラスの国内生産は明治42年からですので、旧本館の窓ガラスはすべて海外からの輸入品だったと思われるます。



改修工事板

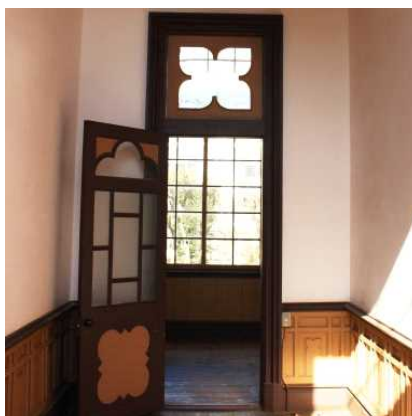


東棟廊下より旧本館裏を望む

29 応接室

—旧本館二番目に豪華な部屋—

玄関ホールに戻り、ここからは正面西翼と西棟をご案内します。玄関扉の右隣には宿直室と同じ形状のドアがあります。この部屋は戦後、新制高校になってから進路指導室として使われていましたが、もともと応接室でした。このため、校長室に次いで装飾性に富む造りです。外観の美を重視した尖塔の直下に作られた部屋であるため、間口の狭い部屋となっています。左右対称の原則に基づき、宿直室の間口と同じです。



応接室から廊下を望む



豪華な応接室内部

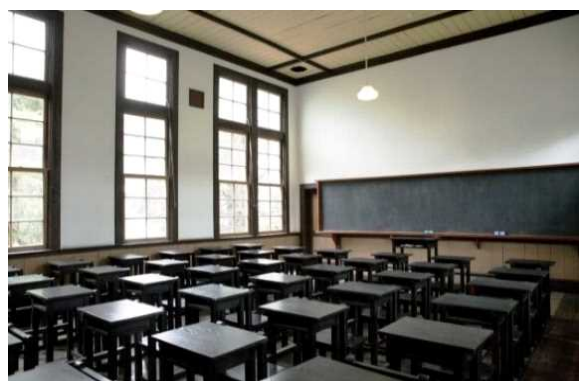
30 復元教室

—旧制中学校の生徒がひよっこり出てきそうな教室—

さらに右隣は、創立90周年時に、かつての普通教室を再現したものです。この教室も一切装飾の無いシンプルな構造となっています。教室前後の壁面は広い白壁が特徴的です。生徒用机は、今日では使われていない机と椅子との一体型です。この机は、残されていた設計図を基に教室復元時に製作したものです。

廊下側などの窓ガラスには、「土中」の文字が刻まれています。終戦直後の物資難の折、学校の窓ガラスの盗難被害は大変なものでした。そこで、ガラスの盗難防止のために生徒たちの協力を得て刻み込んだものだそうです。

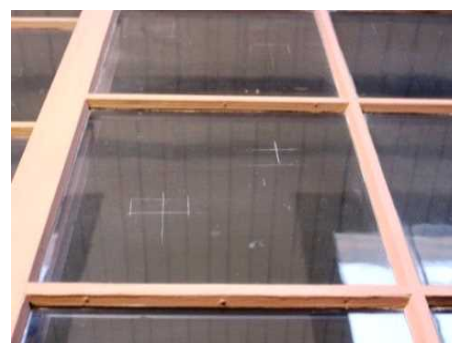
旧本館は、NHKドラマ「坂の上の雲」「おひさま」や、映画「天心」「バンクーバーの朝日」など多くのロケで使われましたが、特にこの部屋は使用頻度が高くなっています。



復元教室



一体型机



窓ガラスの刻字「土中」